

# 宮風呂遺跡発掘調査報告書

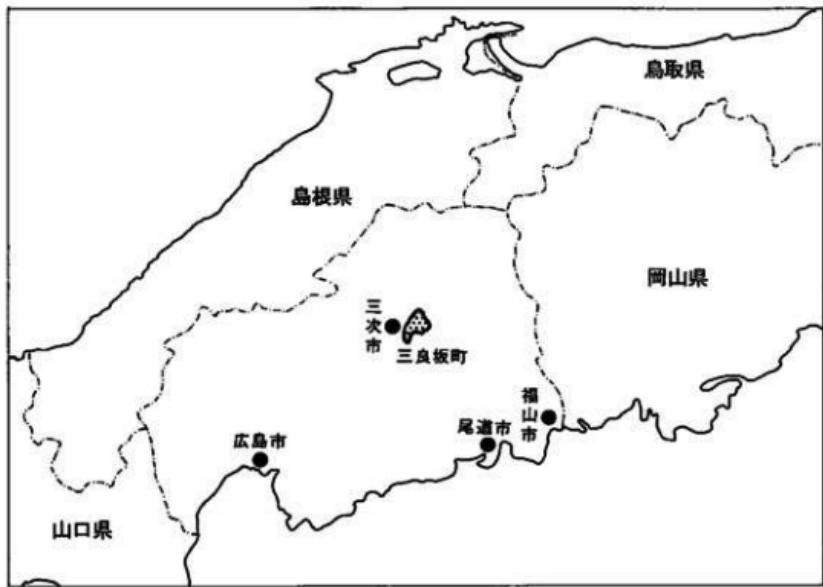
1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 宮風呂遺跡発掘調査報告書

頁・行	誤	正
附言・10	センターした。	センターが実施した。
5・31	赤城山城の南方	赤城山城の北西
10・ 第5回	SB1実測図	SB1実測図(1:60)
16・10	SB6(第12回 図版9)	SB6(第12回)
17・ 第12回		P1とP5の間の柱穴をP6 とする
24・31		削除
25・1		削除

# 宮風呂遺跡発掘調査報告書



1988

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和62（1987）年度に実施した三良坂ビレネ病院建設事業に伴う、宮風呂遺跡（広島県双三郡三良坂町大字田利字宮風呂265他）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、調査区の東側部分を医療法人新和会三次病院から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施し、また、調査区西側部分は同病院から委託を受けて三良坂町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査区を調査研究員山田繁樹、岩本芳幸が、三良坂町教育委員会調査区は、同教育委員会主査菅靖宏が担当した。
4. 三良坂町教育委員会が担当した発掘調査の報告書は、同町教育委員会から委託をうけて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターした。
5. 遺構、遺物の実測、写真及び整図は、山田・岩本・菅があたった。また本書の執筆は山田（I・III・IV・V）・岩本（II）が行い、編集は山田が行った。
6. 本書に使用した略記号は、次のとおりである。  
S B = 坚穴住居跡・掘立柱建物跡、S K = 土壌
7. 掲図と図版の遺物番号は、同一である。
8. 第1図は、建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（三良坂）を使用した。
9. 本文中に用いた方位は、第1図以外磁北である。
10. 第4図中の掘立柱建物跡で遺構番号のないのは建物跡の可能性のあるものである。



三良坂小学校 校外学習（宮風呂遺跡の見学）

## 本文目次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
II 宮風呂遺跡の環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III 調査の概要	8
IV 遺構と遺物	9
1. 竪穴住居跡	9
2. 掘立柱建物跡	15
3. 土壌	21
V まとめ	28

## 図版目次

図版1 遠景 (北東から)	近景 調査前 (南から)
図版2 近景 調査後 (南から)	S B 1 調査風景 (南西から)
図版3 S B 1 完掘状況 (東から)	S B 1 土壌遺物出土状況 (西から)
図版4 S B 2 完掘状況 (東から)	S B 3 完掘状況 (南から)
図版5 S B 4 完掘状況 (南東から)	S B 9 完掘状況 (西から)
図版6 S K 1 遺物出土状況 (西から)	S K 1 完掘状況 (東から)
図版7 S K 2 完掘状況 (東から)	S K 4 完掘状況 (北から)
図版8 S K 5 土層断面 (南東から)	S K 7・8 完掘状況 (南東から)
図版9 S K 6 遺物出土状況 (東から)	S K 6 完掘状況 (北から)
図版10 出土遺物 1	
図版11 出土遺物 2	

## 挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)	4
第2図	遺跡位置図 (1 : 10,000)	6
第3図	遺跡周辺地形図 (1 : 2,000)	8
第4図	遺構配置図 (1 : 250)	折込
第5図	S B 1 実測図 (1 : 60)	10
第6図	S B 1 出土遺物実測図(1) (1 : 3)	11
第7図	S B 1 出土遺物実測図(2) (1 : 3)	13
第8図	S B 2 実測図 (1 : 60)	14
第9図	S B 3 実測図 (1 : 60)	15
第10図	S B 4 実測図 (1 : 60)	16
第11図	S B 5 実測図 (1 : 60)	17
第12図	S B 6 実測図 (1 : 60)	17
第13図	S B 7 実測図 (1 : 60)	18
第14図	S B 8 実測図 (1 : 60)	19
第15図	S B 9 実測図 (1 : 60)	20
第16図	柱穴内出土遺物実測図 (1 : 3)	20
第17図	S K 1 実測図 (1 : 40)	21
第18図	S K 1 出土遺物実測図 (1 : 3)	22
第19図	S K 2 実測図 (1 : 30)	22
第20図	S K 3 実測図 (1 : 30)	23
第21図	S K 4 実測図 (1 : 30)	24
第22図	S K 6 実測図 (1 : 40)	25
第23図	S K 6 出土遺物実測図 (1 : 3)	26
第24図	S K 7・8 実測図 (1 : 30)	26
第25図	覆土中出土遺物実測図(1) (1 : 3)	27
第26図	覆土中出土遺物実測図(2) (1 : 2)	27

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

社会福祉法人くるみ会（以下「くるみ会」という。）は、双三郡三良坂町大字田利に社会福祉施設の建設を計画し、昭和57年9月に広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して建設予定地内の文化財の有無及び取り扱いについての照会を行った。県教委では、これを受けて昭和58年1月に建設予定地内の試掘調査を行い宮風呂遺跡を確認し、回答した。その後、県教委とくるみ会で、取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存は困難であることから、記録保存の措置をとることとしたが、種々の事情により建設計画が中止となった。

その後、医療法人新和会三次病院（以下「新和会」という。）は、前述の地に三良坂ビレネ病院の建設を計画し、昭和61年10月県教委に対し文化財の有無及び取り扱いについて照会を行った。県教委は、同年11月新和会に病院建設予定地内に宮風呂遺跡が含まれる旨を回答した。県教委と新和会はこの取り扱いについて調整・協議を重ねたが、遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、事前に発掘調査を実施し記録保存を図ることになった。新和会は、昭和62年1月に財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査の依頼を行い、調査は4月から実施することになった。

一方、新和会は、先の計画では病室などが狭いため、ゆとりのある建物にしたいという観点から設計変更を行い、敷地面積を拡張した。この部分にも遺跡が存在することから、3月に新和会からセンターに同地を追加分として調査を依頼したい旨の連絡があった。しかし、センターでは、昭和62年度の事業計画が決定しており、追加分の調査は困難であるため、県教委・三良坂町・新和会及びセンターの四者で協議を重ねた。

協議の結果、新和会は再度設計変更を行い調査面積を最小限に留め、追加分の調査は、三良坂町教育委員会（以下「町教委」という。）が実施することになった。しかし、町教委自体では調査体制が整わないため、センターが協力して調査を行うこととなり、4月から同時に開始した。

なお、町教委調査分の発掘調査報告書は、昭和62年度にセンターが町教委の委託を受けセンター調査分と合わせて作成することとなり、本書に掲載した。

## 2. 調査の経過

調査開始前の地形測量は、町教委が業者に委託して行った。調査を開始するにあたり、遺跡の立地条件や試掘調査の状況から遺構の密集度が高いことが予想されたために遺構を事前に把握し、調査計画をたてるために4月8日から10日の間、重機による表土剥ぎ作業を行い、遺構の確認を行った。

また、多量の遺物の出土が予想されたため、10mグリッドを設定して、遺物取り上げを行うことにした。調査を進めていくうち、遺構の状況が明らかとなり、町教委調査区で竪穴住居跡・土壙などを確認し、また、調査区全域にわたって柱穴跡と考えられる遺構を検出した。

以上の経過を経て、4月13日から調査を開始し、6月6日には予定通り終了した。同日町教委と共に遺跡見学会を開催したが、当地域だけでなく福山市・広島市等からも参加者があり、参加者数は約200名と盛会であった。また、調査期間を通じ地元小学校児童等多数の見学者があり、文化財に対する関心の高さがうかがわれた。

発掘調査にあたっては、県教委の指導を得るとともに、三良坂町教育委員会・医療法人新和会三次病院の関係者の方々をはじめ、地元住民の方々の御協力を得ることができた。また、報告書作成にあたっては、三良坂町文化財保護委員新祖隆太郎氏から資料の提供を得た。末筆ながら記して感謝の意を表したい。



遺跡見学会風景

## I 宮風呂遺跡の環境

### 1. 地理的環境

宮風呂遺跡は、広島県三次郡三良坂町大字田利字宮風呂265番地外に位置している。中国山地の山間支谷に位置する三次盆地は、その東・西・南・北から河川を集め中国山地を蛇行しながら日本海に注ぐ江の川によって形成された侵食盆地である。

三良坂町は、三次盆地の北東縁辺部にあたり、東は甲斐郡總領町、西は三次市、南は三次郡吉舎町、北は庄原市と境を接している。町内には、江の川の支流である馬洗川が南北に、馬洗川と合流する上下川が東西に貫入蛇行を繰り返しながら流れしており、それぞれ沖積小平野を形成している。また上下川の上流地域の灰塚地区ではダム建設計画が進んでいる。

町内を貫流し江の川に注ぐ馬洗川沿いには、上下川と合流する地点から三次市内にかけてその支流も含めた流域の両岸に、多数の古墳が立地している。三次盆地は、古墳密集地として知られているがそのほとんどは、この馬洗川流域に存在している。宮風呂遺跡は、上下川が田利から皆瀬にかけて大きくS字状に蛇行する舌状段丘上に位置しており、上下川との比高差約23m、水田面との比高差約10mである。本遺跡の南東に広がる水田は、三次盆地でも数少ない条里的地割のみられた地域であったが、近年のは場整備事業で景観が変貌している。また、本遺跡と同一丘陵上や、周囲の丘陵上には数多くの古墳群が立地しており三良坂町でも遺跡の密集度の高い地域である。

### 2 歴史的環境

三良坂町は、古墳密集地域として知られる三次盆地の一角にあたり、多数の古墳群や各時代の遺跡が存在している。以下、宮風呂遺跡が所在する田利地区を中心に、周辺の主要な遺跡について概観して行きたい。

旧石器時代 田利地区では、この時代の遺跡は確認されていないが、塩野浦遺跡（三良坂）で安山岩製のナイフ形石器が、また沖江龍王山遺跡（三良坂）からは黒曜石製の尖頭器が採集されている。

縄文時代 植松遺跡（皆瀬）では、植松第1号古墳封土中から早期末の条痕文土器と石錐が出土している。また、皆瀬北遺跡（皆瀬）では、後期の土器と円礫の両端を打ち欠いて作った多量の石錐が出土している。この他、田利・皆瀬・灰塚羽木、仁賀日南地区では、石斧や石皿などが出土している。

**弥生時代** この時代の遺構は、田利地区を中心に確認されている。昭和28（1953）年に調査が行われた野曾原遺跡（田利）では、一辺7～8mの方形竪穴住居跡が検出され、中期後半～後期の土器が出土している。田利遺跡（田利）では、中期後半の塩町式土器が多量に出土した他、太形蛤刃石斧・磨石・石錘等が出土している。この他、反遺跡（三良坂）などの町内数ヶ所の遺跡で弥生土器が出土している。

**古墳時代** 三良坂町内では、500基以上の古墳が確認されており、これらの古墳は、30以上の古墳群を形成している。中でも田利地区は、古墳の密度が高い地域であるが、大正時代から戦後にかけての開墾によって消滅した古墳も少なくない。田利地区には、8群の古墳群があるが、野曾原北古墳群・野曾原西古墳群・野曾原東古墳群・かつえ坂古墳群・西ヶ原古墳群は、横穴式石室を内部主体とするものが多い。他に、四慎東古墳群・田利北古墳群・田利南古墳群がある。



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)

町内の古墳のうち調査されたものには、稻荷山D-2号古墳（三良坂）・岡田山第3号古墳（岡田）・植松第1~4号古墳（皆瀬）・皇渡古墳（仁賀）などがある。このうち、稻荷山D-2号古墳と岡田山第3号古墳が土壙、植松第1号古墳が粘土層と土壙、植松第4号古墳が箱形石棺を内部主体としている。他に、土壙・箱形石棺などを内部主体としているものに、塩野浦古墳群（三良坂）・塩野浦東古墳群（三良坂）・菟崎古墳群（仁賀）・日野迫古墳（灰塚）などがあげられ、横穴式石室導入前の古墳と考えられている。

植松第2・3号古墳と皇渡古墳の内部主体は横穴式石室で、いずれも床面に須恵器を敷きつめている。町内の横穴式石室を有する古墳としては、他に御箱山古墳群（三良坂）・仮屋追南古墳群（仁賀）などがあげられる。

住居跡は、今回調査を実施した宮風呂遺跡で確認された。八月田遺跡（田利）からも古墳時代の須恵器・土師器が出土しており、この時期の集落跡と推定される。

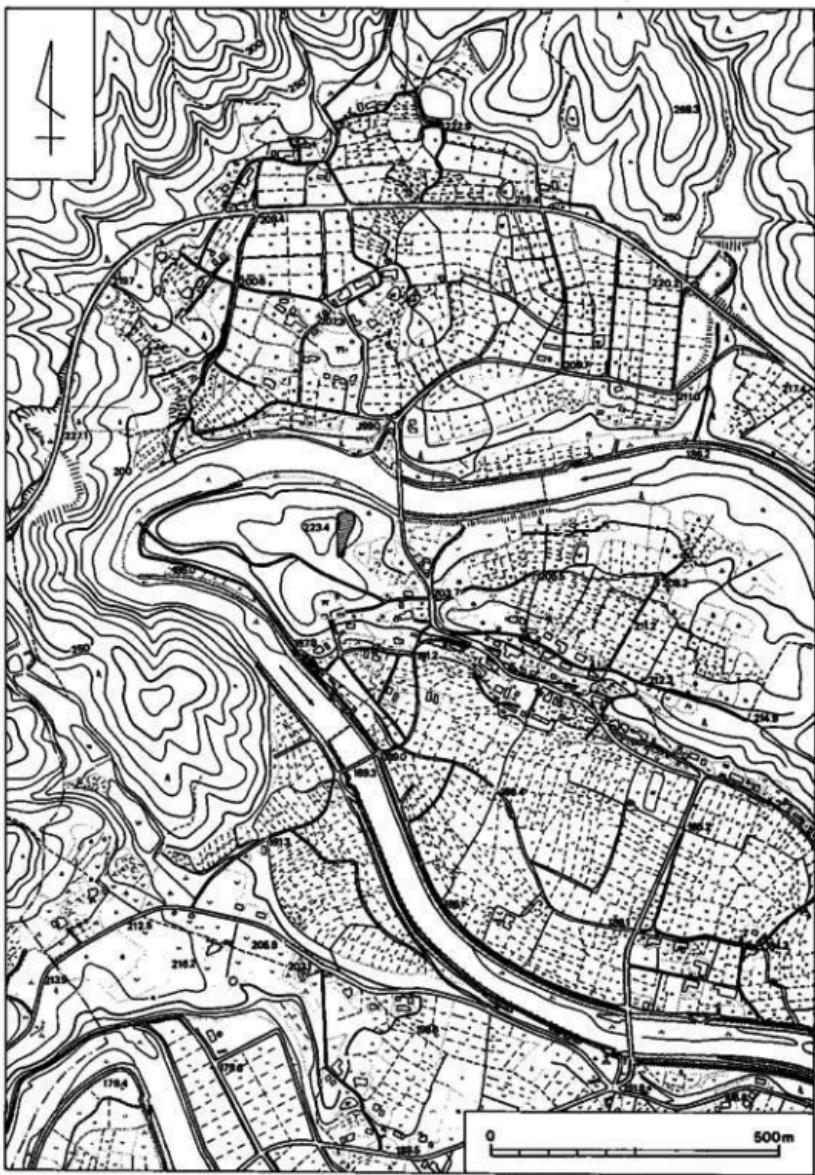
奈良~平安時代 三良坂町は、この当時三次市東部と双三郡吉舎町とともに三谷郡に属していた。三次市向江田町の寺町庵寺は、「日本靈異記」に記載されている三谷寺に比定され、三谷郡衙は、三次市大田幸町に「幸利」という地名が残ることなどから幸利遺跡が郡衙跡として推定されている。

町内では、八月田遺跡から奈良時代の須恵器が出土し、植松遺跡内から古代の製鉄に伴うと考えられる木炭窯跡が検出されている。また田利地区では、一町方格の地割が認められ、これは条里制に起因するのではないかという可能性も考えられている。

中世 鎌倉時代、武藏国広沢氏が三谷郡12郷の地頭職を得、当地に入部し、一族を領内に配した。後に広沢氏は和智氏と江田氏に別れ、和智氏は吉舎町の南天山城を本拠とし、江田氏は三次市三若町の旗返山城を本拠とした。三良坂町内に残る山城跡には、和智氏に関係するものが多い。主な山城跡として、赤城山城跡（田利）、萩原山城跡（棗原）、福山城跡（灰塚）、荒巣山城跡（長田）などがあげられる。赤城山城は、和智氏の一族広沢時基が築いたと伝えられ、宮風呂遺跡の南にある田利八幡神社も広沢時基の創建と伝えられる。なお、中世には宮風呂遺跡が所在する地に多里山城（保古里山城）が築かれていた。この山城は、赤城山城の出城と伝えられるが、その遺構は明確でない。

また、田利古墓（田利）、清替屋古墓（棗原）、堂の前古墓（長田）など中世墳墓が多く残るが、これらは山城跡と関連するものと考えられる。田利古墓は、赤城山城の西にあり、数基の五輪塔からなる。

この他、先述の八月田遺跡からは、須恵質土器・土師質土器・中国製青磁碗が出土している。この遺跡は、赤城山城の南方約200mにあり、付近に居館の存在が予想される。



第2図 遺跡位置図（アミ目部分は調査区）（1 : 10,000）

## 註

- (1) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『地宗寺遺跡発掘調査報告書』昭和57(1982)年。
- (2) 三良坂町教育委員会『植荷山D-2号古墳』昭和58(1983)年。
- (3) 河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告」『芸備』第3集昭和50(1975)年。
- (4) 註(3)と同じ。
- (5) 三良坂町誌編集委員会『三良坂町誌』昭和48(1973)年。
- (6) 註(2)・(3)と同じ。
- (7) 註(2)と同じ。
- (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡田山第3号古墳発掘調査報告』昭和59(1984)年。
- (9) 註(3)の文献。  
日本考古学協会『植松1号古墳』『日本考古学年報』24昭和48(1973)年。
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群-植松第2号・3号・4号古墳・植松窓跡一』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集昭和62(1987)年。
- (11) 註(5)と同じ。
- (12) 三次市教育委員会『備後寺町庵寺-推定三谷寺跡第1次発掘調査概報』昭和55(1980)年。
- (13) 藤岡謙二郎編『過疎化の進む内陸盆地と河谷地域』昭和47(1972)年。
- (14) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群-植松第2号・3号・4号古墳・植松窓跡一』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第61集昭和62(1987)年。
- (15) 中世については、次の文献等を参考とした。  
三良坂町誌編集委員会『三良坂町誌』昭和48(1973)年。
- (16) 潮見 浩監修『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇昭和49(1974)年。
- (17) 三良坂町文化財写真集編集委員会『写真集・みらさかの文化財』昭和57(1982)年。
- (18) この古墳は、寄園中世墳墓と称されていたものである。

### III 調査の概要

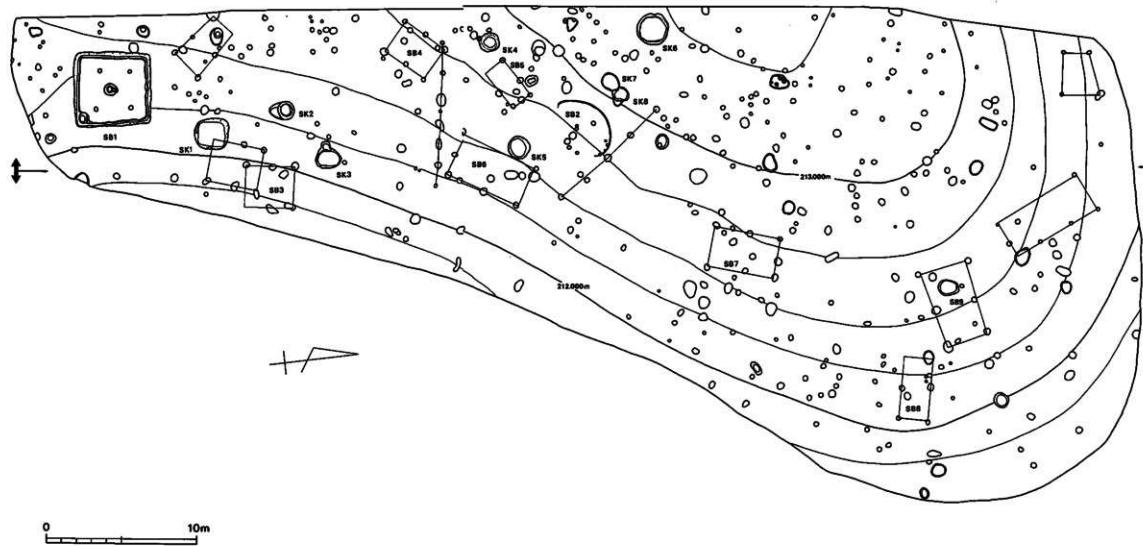
遺跡の立地している丘陵は、比較的傾斜が緩やかである。調査区内の基本土層は、表土・黒色粘質土（黒ボク）・黄褐色粘質土で、黒色粘質土は調査区全域に20~30cm堆積しており、本来各遺構は、黒色粘質土層を掘り込んでいると予想され、覆土も同一色のため検出が非常に困難であることから次層の黄褐色粘質土層付近まで黒色粘質土層を除去し、遺構の確認を行った。

その結果、古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙を検出した。出土遺物は全般的に少なく、遺物が出土した主な遺構はSB1, SK1, SK6で、その他は土師器破片などが少量出土しているのみである。竪穴住居跡は2軒検出し、SB1は4本柱を有す平面形が一辺約5mの方形で、遺存状態も良好であり遺物は高杯が多く出土した。SB2は遺存状態が悪いが、2本柱を有する円形の住居跡と考えられる。掘立柱建物跡の柱穴と考えられるものは調査区全域で検出しているが、柱並びが明確な例はほとんどなく、建物跡の可能性が考えられるのは7棟である。他に、検出した8基の土壙のうちSK2, SK4は、深く掘り込まれ、その形態から貯蔵穴の可能性も考えられる。



第3図 遺跡周辺地形図（アミ目 薄・遺跡範囲、濃・調査範囲）（1：2,000）

町教委調査区 ← センター調査区



第4図 造構配図 (1:250)

## IV 遺構と遺物

### 1. 壁穴住居跡

#### S B 1 (第5図・図版2・3)

調査区最南端に位置しており、今回の調査で検出した遺構の中では、遺存状況も良好で遺物の出土が最も多い住居跡である。

規模 平面形は、 $4.5 \times 5$ mの方形で床面積は $22.5\text{m}^2$ である。壁高は、西側で約60cm、東側は30cmで、床面との角度は約 $60^\circ$ ～ $80^\circ$ である。

溝 住居壁に沿って幅約15cm、床面からの深さ約10cmで断面形が「U」字状の溝が廻っている。溝底は、南西隅から南東隅へ10cm程度低くなる。

床面 硬く踏み締められており、平坦であるが壁溝と同様に南東に向かって約10cm程度傾斜している。

炉 床面のほぼ中央部で、径約75cmの円形の炉跡を検出した。断面形が漏斗状になつておらず、深さは最深部で50cmである。またその形状から北側と中央部を再度掘り込んだ様子を見ることができる。土層観察では、焼土は含まれてはいないが炭化物を含んでいた。

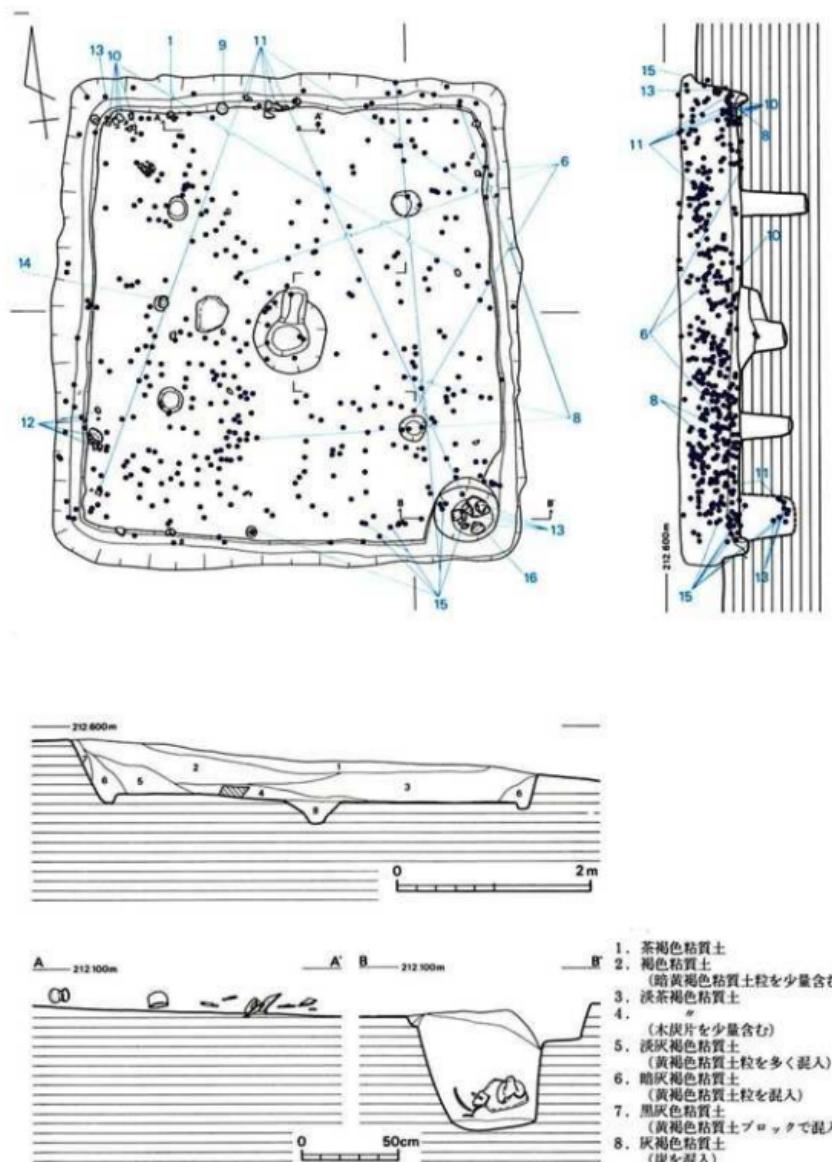
柱穴 住居跡の各隅部分の対角線上に配置された柱穴を4基検出した。径20cm前後の円形で、深さは床面から50～70cmである。柱痕の検出も試みたが、確認できなかつた。

なお、床面の南東隅で、径60cm、深さ65cmの円形土壙を検出した。壁溝との切り合い関係は認められず、S B 1に伴うものと考えられる。貯蔵穴とも考えられるが、壁溝・床面より低位置にあることから集水壙として機能していた可能性も考えられる。その他、S B 1に付随する遺構を検出すために、精査を繰り返したが確認できなかつた。

覆土・遺物出土状況 土層観察によると覆土は、北西から南東に流入堆積しており、遺物は、覆土の上・下層・床面までの間で約500点の土師器破片が出土した。床面直上からは、完形もしくは完形に近い遺物が壁溝に沿って出土し、また、南東隅の土壙内の底付近から、高杯が3個体分出土した。この土壙の覆土は單一層で、住居跡の第3層と同一である。

出土した遺物は、その大部分が土師器で、僅かに上層から須恵器甕の細片が数点出土したのみである。器種は壺・甕・高杯・碗などが見られ、高杯の点数が多いのが特徴である。

また、遺物は、接合状況・水平・垂直分布及び、土層観察から、流入土によって床面に残っていた遺物が移動した可能性の強いもの（No 1・9・10・12・14）と、住居廃絶後早い段階で流入土に混入していたものと二者の可能性が強いもの（No 2～8・11・13～18）とに分類できる。

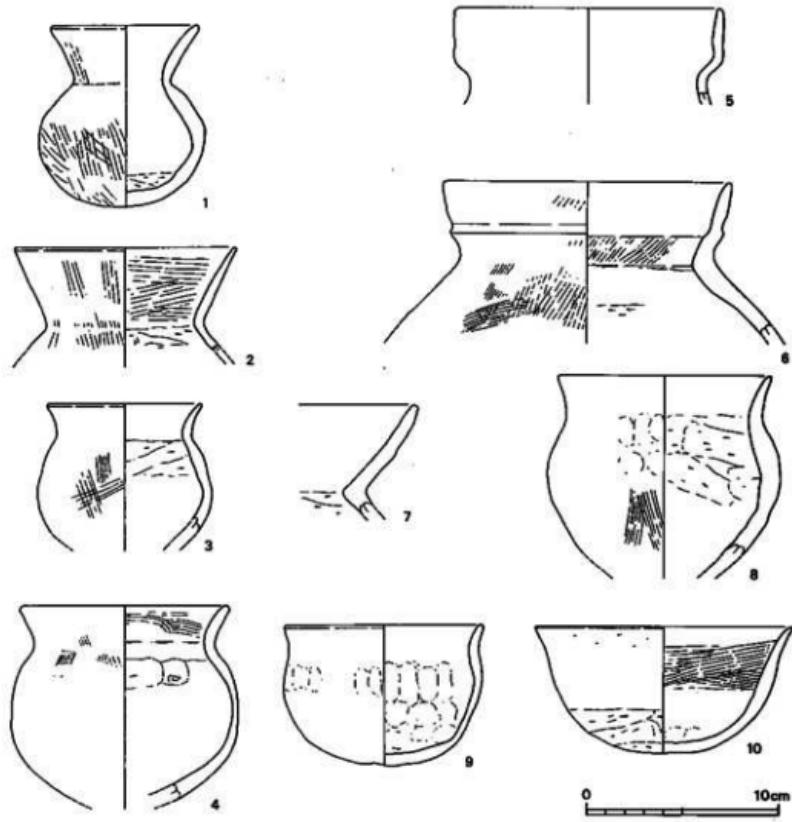


第5図 SB 1 実測図

出土遺物 (第6・7図)

増 (第6図, 1・2, 図版10)

1は、完形で口径7.4cm・器高9.3cm・胴部最大径8.6cmである。口縁部は、「く」字状に外反し端部は丸いがやや面を持っている。器壁は全体的に厚く0.4~0.9cmである。焼成は良好で胎土中に、0.5mm大の砂粒を少量含んでいる。器表面は底部から肩部にかけて粗いハケ目が残っている。肩部から口縁部は、ハケ目を施した後ナデを行っている。内面は、底にヘラ削りが残り、他はナデである。2は、復元口径11.4cmで、口縁部は外反し、端部に近づくに従って薄くなり、端部は丸く面を持たない。内外面ともハケ目の後、かるくナデしている。内面のくびれ部より下はヘラ削りが残る。



第6図 SB 1出土遺物実測図(1) (1 : 3)

### 甕 (第6図, 3・4・5・6・7・8, 図版10)

口縁部の形態によって、3・4・8と5・6に分類できる。3・4は、共に焼成が甘く、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く終る。器表面は粗いハケ目が残り、口縁部周辺は横ナデである。8は、器壁が8mmと厚く頸部周辺に指頭圧痕が残る。内面は、いずれもくびれ部までヘラ削りが施されている。5は、外反した頸部に直立した口縁が付く複合口縁で、内外面とも横ナデが施されている。6は、口縁部が緩やかに外反した頸部からやや外傾気味に口縁部が立ち上がり、頸部と口縁部の接合部外面が凹線状に浅く窪む。体部外面には、ハケ目が残る。口縁部は、内外面とも横ナデで内面のくびれ部周辺は、ハケ目が残り、くびれ部より下は横方向のヘラ削りが施されている。

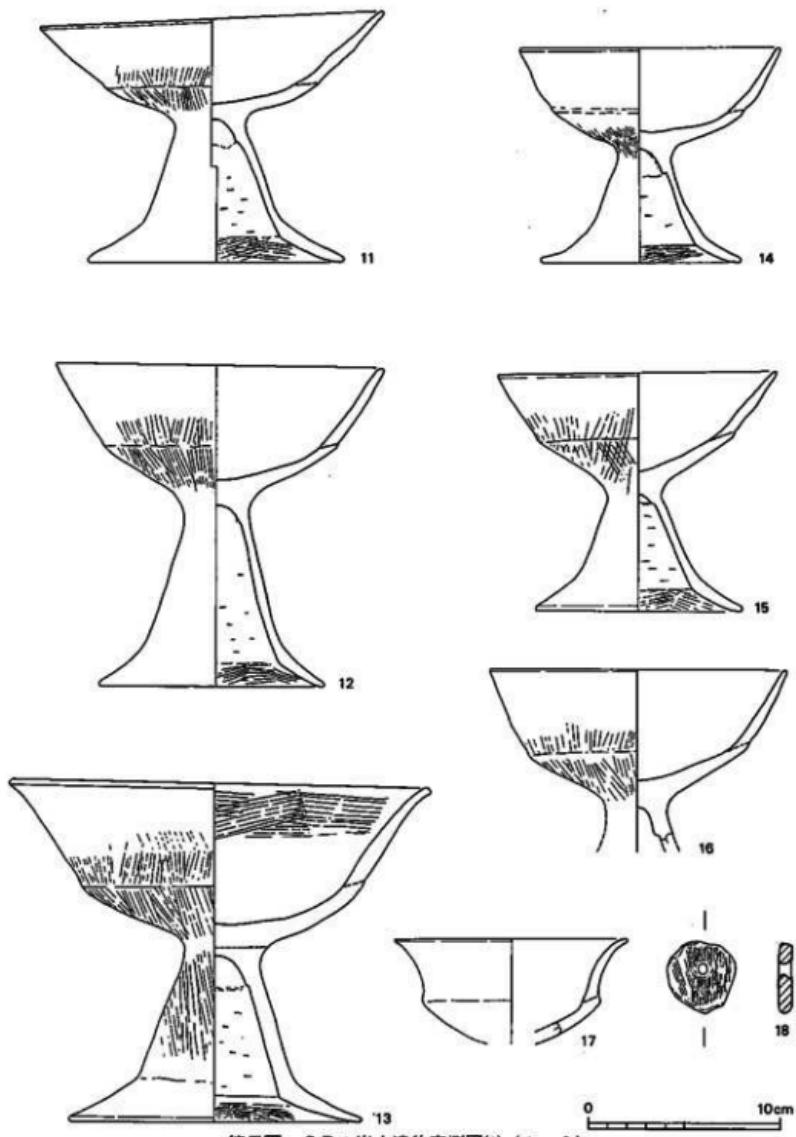
### 鉢 (第6図, 9・10, 図版10)

9は、完形で口径10.1cm・器高7.3cmである。口縁部は僅かに外反し、端部は丸く終り、胴部は、球状に内湾している。内外面とも指頭圧痕が残る。10は、底部から緩やかに外反し口縁部で外反を強め端部は丸い。底部内外面はヘラ削りが残る。内面は、上位に粗いハケ目が残る。

### 高杯 (第7図, 11~17, 図版10・11)

11~16は、杯部の外面に粘土接合痕による稜が残る。杯部と脚部の接合は、円板充填式ではなく差し込み式によるものである。脚柱部内面は、横方向のヘラ削りを行い脚裾部には横方向の粗いハケが施されている。器表面は、粗い縦方向のハケ目・口縁部周辺は横ナデ・脚裾付近はナデが施されているなどの技法・形態上の共通点がみられ、いずれも焼成は良好である。11は、0.5mm大の砂粒を少量含み、杯部が他と較べて浅く脚部も径が太く外へ広がっている。12・13は、口縁端部に面を持っている。12は、口径16.9cmに対して器高が16.6cmと高い。13は、出土した遺物中、口径21.5cm・脚裾部径15.1cm・器高17.5cmと最大のもので、口縁部は杯部接合痕付近から緩やかに外反しながら立ち上り、端部は12と較べて明瞭な面をもつ。また、口縁部内面は、粗い横方向のハケ目が残っている。14は、砂粒をほとんど含まない。杯部は底面から口縁部にかけて内湾しながら立ち上り、端部は丸く終る。15は杯部が脚部から外反し、口縁部は接合痕の部分からやや内傾している。16は、脚部以下を欠損しており、口径15.2cmで0.5mm大の砂粒を少量含んでいる。17は復元口径12.2cmで、口縁部は接合痕の部分から弱く外湾しながら外反する。焼成は甘く0.5mm大の砂粒を少量含んでいる。他の土器と比較して古い形態を有している。

その他18は、紡錘車と考えられ甕か壺の破片に穿孔をしたものである。穿孔は、両側から銳利な工具を用い回転によって行われている。重量は8.6gである。



第7図 S B 1出土遺物実測図(2) (1 : 3)

## S B 2 (第8図、図版4)

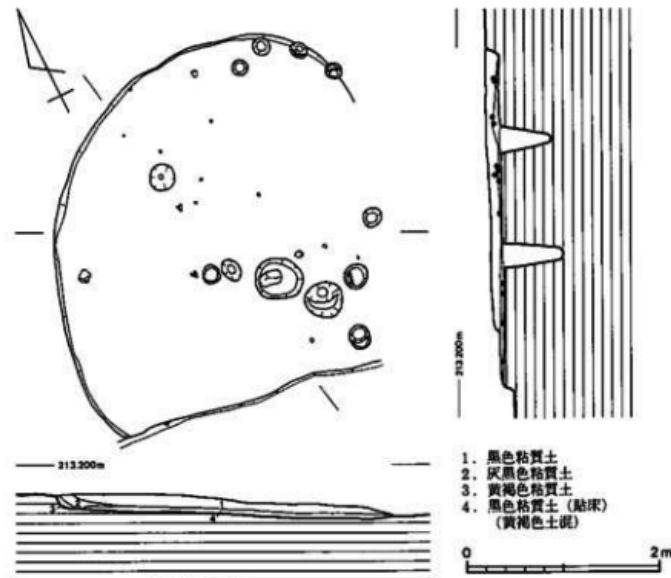
調査区のほぼ中央に位置している。遺存状態は悪く、南側を試掘時のレンチにより削平されていた。壁の一部と、貼床・柱穴を確認したので一応住居跡と認めた。

規模 遺存状態が悪く、壁も西から北側しか確認し得なかったが形状から長径3.5m以上上の円形か橢円形と考えられる。壁高は最も残りの良い所で約10cmで、床面との角度は、約57°である。監溝は存在していない。

床面 ほぼ平坦で、貼床が施されている。貼床は、黒色土と黄褐色粘質土で踏み締められている。厚さは、約10cmである。炉跡と思われる落込みは認められなかった。

柱穴 貼床面の北西寄りで2基確認した。この他に貼床除去後に検出した柱穴も存在するが、本住居には伴わないものと考えられる。2基の柱穴は、径25cm前後、深さ約60cmである。

覆土・遺物出土状況 覆土は、黒色粘質土の単一層で、遺物は、貼床面直上で十数点の土師器片が出土した。これらの遺物は、細片であるため図示し得なかった。



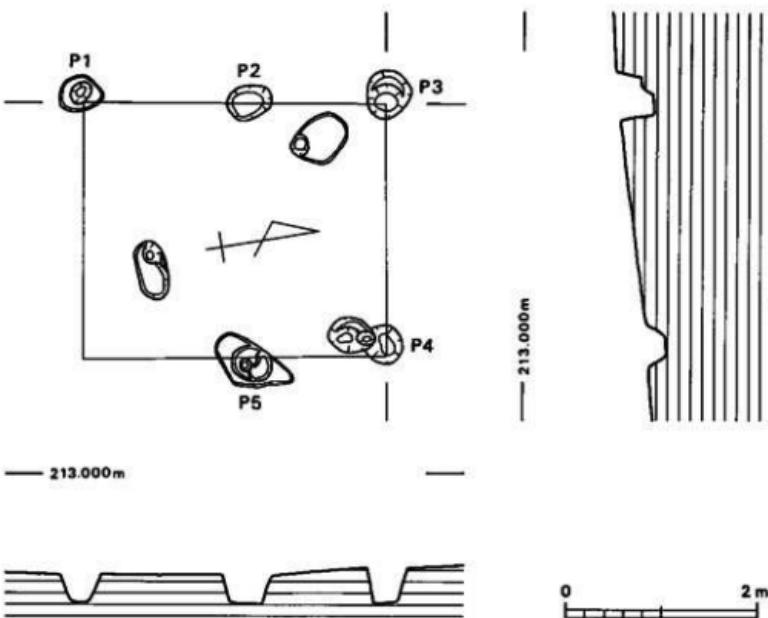
第8図 S B 2 実測図 (1 : 60) 断面図の●は土器

## 2. 掘立柱建物跡

調査区全域で掘立柱建物跡の柱穴と考えられる柱穴を多數検出したが、建物跡としての柱並びが認められるものは少ない。これらの中でSB3～9は、掘立柱建物跡の可能性が強く、中でもSB4とSB7は確実に建物跡として認められよう。また、これらの柱穴からは遺物がほとんど出土せず、出土した柱穴でも図示し得た遺物は2点で、その他は細片であった。

### SB3 (第9図、図版4)

南東隅の柱穴は検出できなかったが、調査区の南東に位置する東西2間(3.2m)×南北1間(2.6m)の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行方向がP1～P3で、1.7m～1.5mである。柱穴は、いずれも径40cm前後、深さ約35cm前後の規模をもつ。建物の主軸はN-9°-Eで、面積は8.32m<sup>2</sup>である。また別の建物跡の可能性のある柱列と重複しているが、先後関係は不明である。



第9図 SB3実測図(1:60)

#### S B 4 (第10図、図版5)

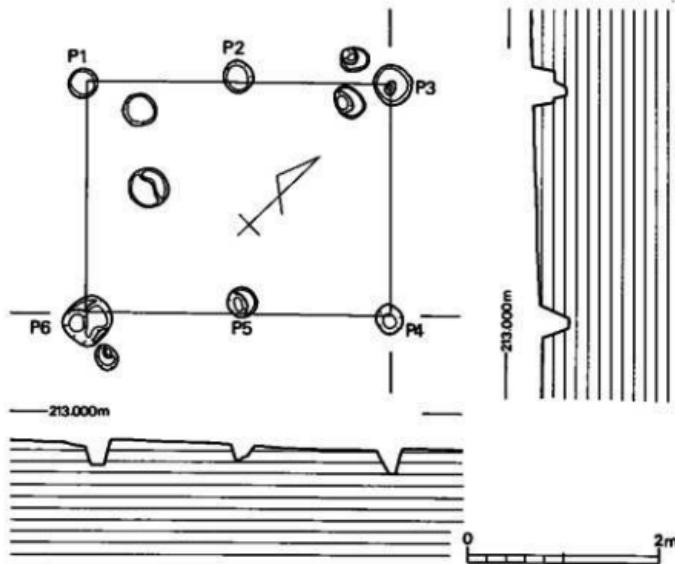
S K 4 の南へ7.5mの地点に位置している桁行2間(3.2m)×梁行1間(2.4m)の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、桁行方向が両側とも1.6mと等間で、面積は7.68m<sup>2</sup>である。柱穴は、直径30~50cm、深さ30cm前後で、P 3 の柱痕跡から径15前後の柱材を使用していたと考えられる。建物の主軸方向は、N-44°-Eである。

#### S B 5 (第11図)

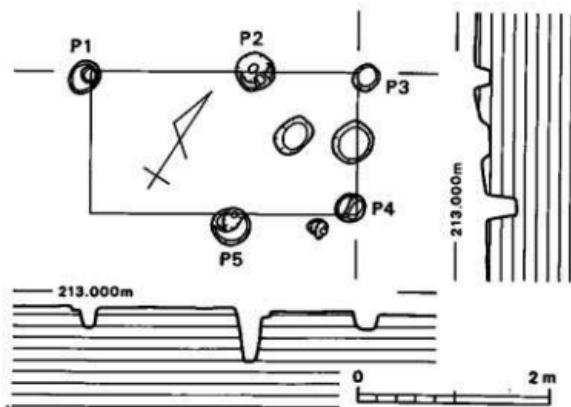
S K 4 と S B 2 の中央付近に位置する桁行2間(2.8m)×梁行1間(1.5m)の掘立柱建物である。主軸方向はN-52°-Eで、面積は4.2m<sup>2</sup>を7棟のうち最小である。柱穴は南北隅が不明であるが、直径30~40cm、深さ30~50cmで、柱間寸法はばらつきが見られる。

#### S B 6 (第12図、図版9)

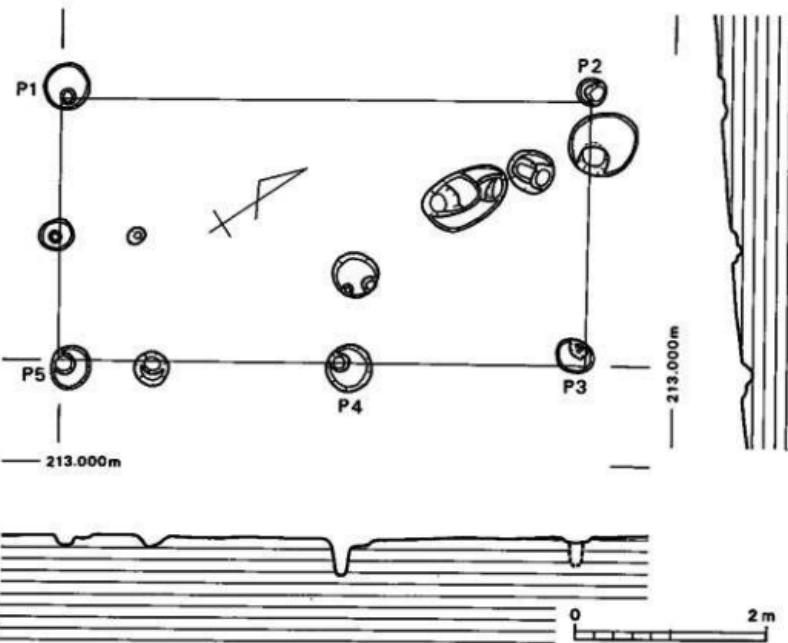
調査区の中央付近・S K 5 と接している掘立柱建物跡である。規模は、桁行2間(5.5m)×梁行2間(2.7m)で、面積は14.9m<sup>2</sup>・主軸方向はN-34°-Eである。北西側の中央柱穴と北梁行中央柱穴は、精査したもののが検出できなかった。桁行の柱間(2.7m)と北東桁側の柱間寸法が2.7-2.8mとほぼ等しい。柱穴は、直径30~50cm、深さ10~40cmである。南北梁行の柱穴は、P 1 の深さに揃えている。P 1 ~ P 6 まで、断面で柱材の痕跡



第10図 S B 4 実測図 (1 : 60)



第11図 SB 5 実測図 (1 : 60)



第12図 SB 6 実測図 (1 : 60)

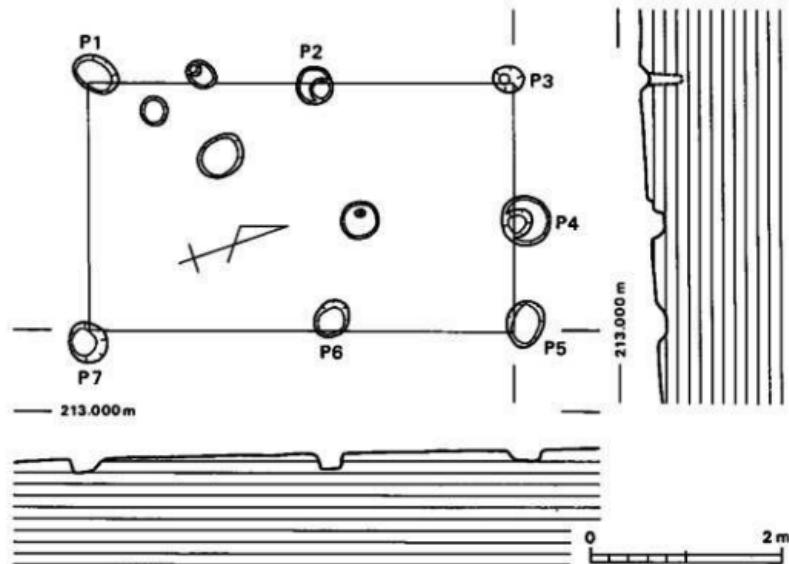
を見ることができ、径12~14cm程度の柱材が使用されていたと考えられる。

#### S B 7 (第13図)

S B 2 から北東へ約10mの地点に位置している。規模は、南梁行の中央柱穴を確認できなかったが、柱間寸法は、桁行2間(4.5m)×梁行2間(2.6m)で、面積は11.7m<sup>2</sup>である。北梁行がP 3 から1.4m~1.2m、桁行は、両側とも南側から2.4m~2.0mと対応している。柱穴は、直径30cm~40cm前後で深さは検出面から20cm~40cmである。また、P 3 の柱穴断面から10cm前後の柱材を使用していたと考えられる。主軸方向はN-19°-Eで、S B 8 とほぼ直交している。

#### S B 8 (第14図)

調査区内で最東端に位置する東西2間(4.0m)×南北1間(2.0m)の掘立柱建物跡で面積は8m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-78°-Wで、S B 7 とほぼ直交している。柱間寸法は、南北隅の柱穴が不明であるが、桁行P 1 - P 2 - P 3 · P 4 - P 5 が2.0m、東梁行2.0mと等間である。柱穴は、直径30cm~70cm、深さは、検出面から15cm~40cmで、北桁行は検出面の傾斜に沿って深くなっている。P 5 の柱穴断面から径10cm程度の柱材の使用がうかがえる。



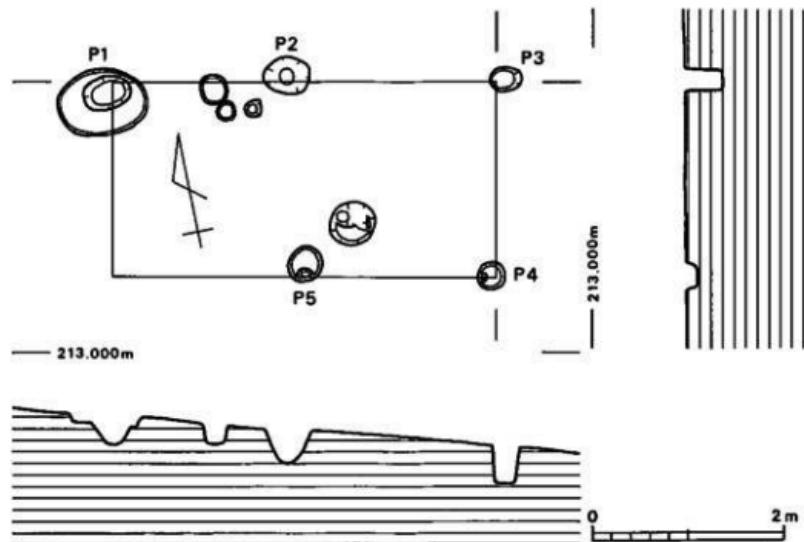
第13図 S B 7 実測図 (1 : 60)

### S B 9 (第15図、図版5)

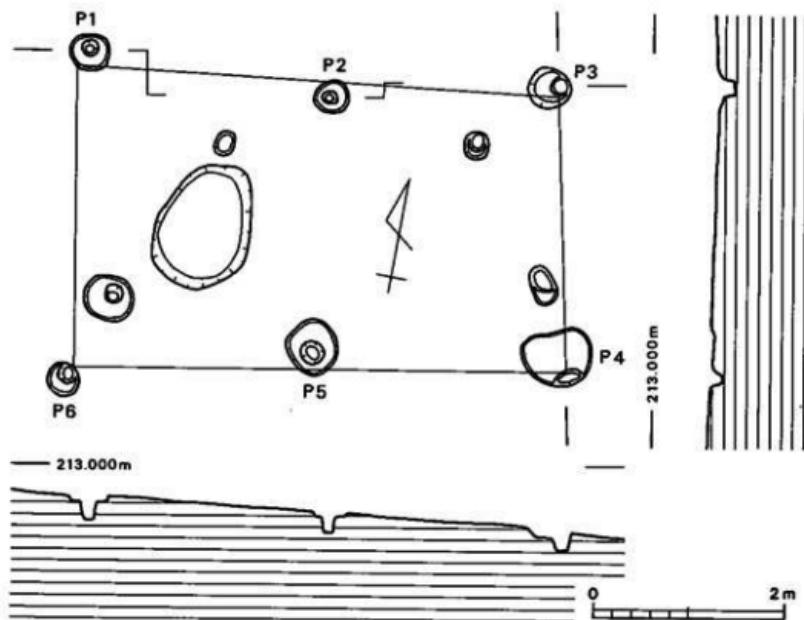
調査区内最北端に位置している。北側桁行方向の柱並びが悪いが、東西2間（5.1m）×南北1間（2.9m）で面積15.3m<sup>2</sup>と最大規模である。主軸方向は、N-80°-Eである。柱間寸法は、東梁行2.9m、西梁行3.1mと等間でない。南側の桁行はP4から2.6m-2.5mである。柱穴は、直径30cm~50cmで深さは、検出面から20cm~30cmである。各柱穴の断面から径15cm程度の柱材の使用が考えられる。

S B 3~9以外にも、S B 1の北側周辺に2棟、S B 9の北西側周辺に2棟、掘立柱建物跡と考えられる柱穴列が存在している。確実に建物跡とするには、S B 3~9と較べて可能性が薄い。又、S B 4とS B 5に挟まれるように東西方向に6間（約9.5m）の柱穴列が、S B 2の北西側に4間（約8.5m）で北西~南東方向の柱穴列が存在している。これらは、いずれも他に対応する柱穴が存在していないことから、不明確ではあるが柵としての可能性が考えられる。

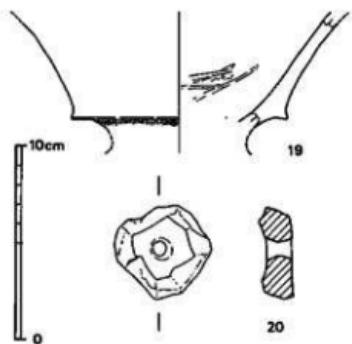
また、この地は、中世に多里山城が築かれていたことで知られているが、今回の調査で確認した掘立柱建物跡の柱穴及び調査区内においても中世の遺物は、全く出土しておらず少なくとも、調査区内で中世の建物跡が存在した可能性は薄い。



第14図 S B 8 実測図 (1 : 60)



第15図 SB 9 実測図 (1 : 60)



第16図 柱穴内出土遺物実測図 (1 : 3)

#### 柱穴内出土遺物 (第16図、図版11)

19・20とも、掘立柱建物跡には伴わない柱穴内から出土している。19は、鼓形土器の上台部分の破片と考えられるもので、色調は淡茶褐色で焼成は良好である。口縁部周辺及び上台部の内外面は横ナデ、筒部付近は斜め方向のヘラ磨きが施されている。筒部の外面は、目の細いハケ目が残っている。上台部の稜は、丸く終っている。20は、弥生土器の壺か甌の底部の破片である。中央部に孔がある。穿孔は、焼成後に両側から回転によって穿たれている。重量は36.4gで、紡錘車の未製品かと考えられる。

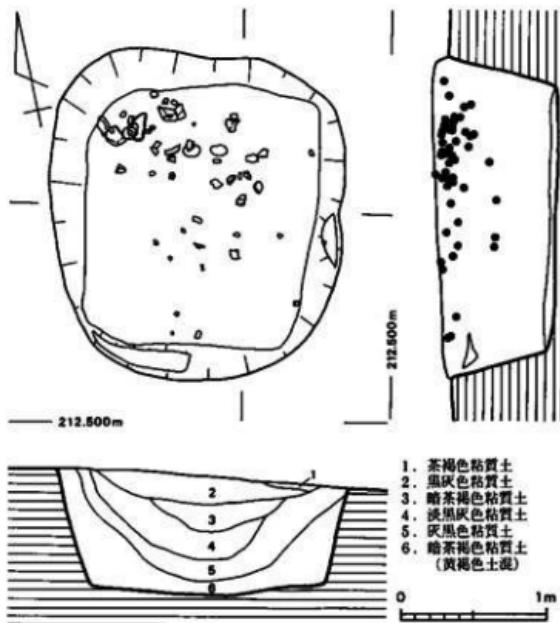
### 3. 土壙

8基の土壙を検出した。平面形は、方形と円形を呈しており、調査区内中央部から南部にかけて立地している。遺物は、SK1, SK6から主に出土しており、他の土壙からは図示できる遺物は出土していない。

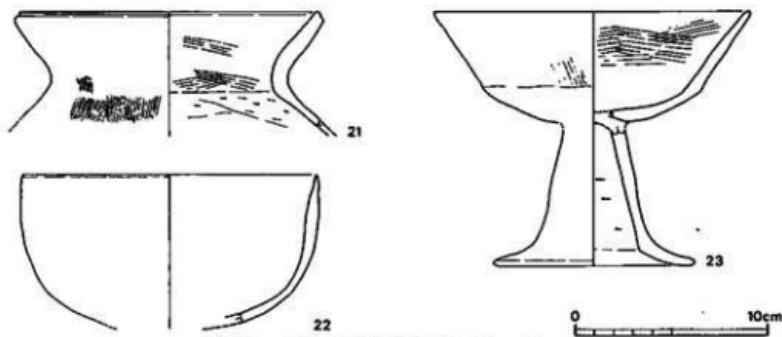
#### SK1 (第17図、図版6)

SB1から北東へ約3mの地点に位置している。土壙の中では最も遺物の出土量が多い。規模・平面形は、一辺1.5m~2.0mの隅丸方形で、床面は、一辺が1.2m~1.6mである。壁は、東側と南側にテラス状に平坦面があり、床面との角度約77°で検出面から70cm~80cmの深さで掘り込まれている。また、床面は平坦であるが、中央付近でやや窪んでいる。

遺物出土状況は、覆土が自然堆積の状況を示しており、遺物は、ほとんどが第5層より上層で、また、北西部に集中して出土している。これらの遺物は、SK1がある程度埋没した段階で遺物を廃棄したとも考えられるが、No22の椀がSB1の覆土中出土遺物と接合していることから、流入土に混入していたものと考えられる。



第17図 SK1実測図 (1:40) 断面図の●は土器

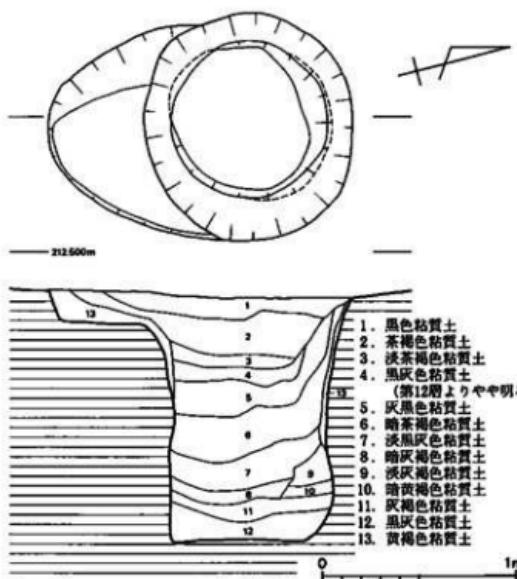


第18図 SK 1 出土遺物実測図 (1 : 3)

#### 出土遺物 (第18図、図版11)

細片が多く、図示できたのは3点のみである。21は、頸部以下を欠く壺で復元口径15.6cmである。焼成は良好で、淡茶褐色で胎土は1mm大の砂粒を多く含んでいる。口縁部は頸部から緩やかに外反しており端部は丸みをもつ面に沈線が一条施されている。調整は、内外面とも横ナデであるが、内面は粗いハケ目が残る。頸部は内面が斜めに斜方向のヘラ削

り、外面はハケ目が残っている。22は、復元口径15.2cmの壺である。茶褐色で焼成は良好である。1mm大の砂粒を少量含んでいる。底部から内湾しながら立ち上り、口縁部は丸く終る。内外面ともにナデ、口縁部周辺部のみ横ナデが施されている。内外面とも成形時に粘土の水分が少なかったためか、亀裂が入っている。また、SB 1の覆土中から出土した破片と接合している。23は、復元値で口径16.6cm、脚径10.4cm、器高13.2cmの高杯である。口縁部は、接合部



第19図 SK 2 実測図 (1 : 30)

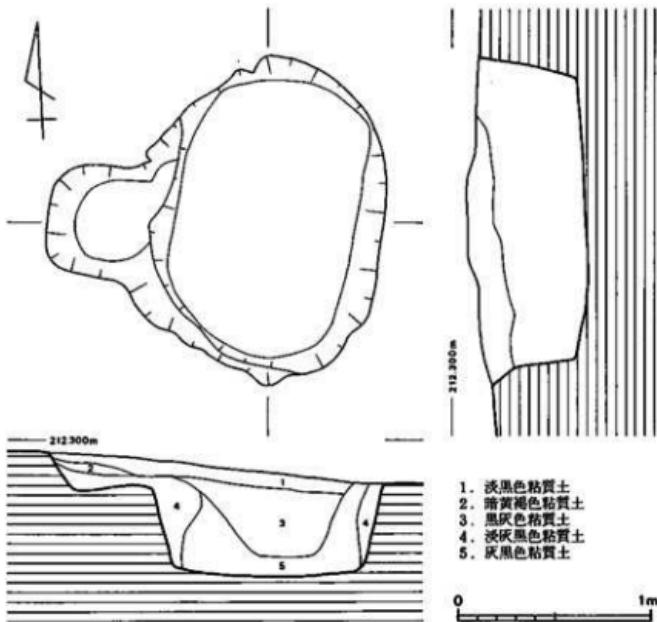
から直線的に立ち上り端部は丸く終っている。調整は内外面とも粗いハケ目が残るが、口縁部外面はハケ調整後、横ナデが施されている。脚部は、ナデが脚裾内面まで施され、脚柱部内面は横方向のヘラ削りが施されている。

#### SK 2 (第19図、図版4・7)

SK 1から北へ5mの地点に位置している。

規模・平面形は、長径約1.6m・短径約1.2mの円形、床面は直径約0.8mのほぼ円形で平坦である。検出面からの深さは約1.3mである。壁は、床面からほぼ垂直に立ちあがるが、床面周辺の北半分はやや外側に掘り込まっている。また、SK 2の南辺には重複して径約1.0m前後、検出面からの深さ約1.5mの落ち込みがあるが、土層観察から切り合い関係が認められず、SK 2に伴うと考えられる。調査区内では、SK 3が同様の形態を示している。

覆土は、上層から下層まで乱れがみられず自然堆積で埋没した状況をうかがうことができる。遺物は、全く出土していない。



第20図 SK 3実測図 (1 : 30)

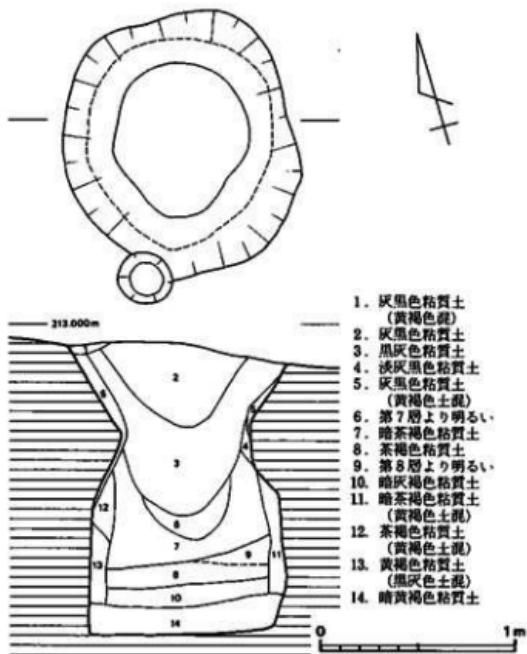
### SK 3 (第20図、図版4)

SB 3から北へ1.5mの地点に位置している。

規模・平面形は、約 $0.8 \times 1.0$ mの隅丸長方形であるが、SK 2と同様にテラス状の段を東側に有している。テラス状部は、長辺の斜面上側に設けられており検出面から約20cm掘り込まれている。形状は、一辺約0.4mの方形状である。壁は、検出面から深さ約50cmで、床面との角度76°で掘り込まれている。床は、中央部が少し窪んでいる。覆土の状況から第4層が埋没した段階で、新たな遺構が存在した可能性も考えられる。遺物は、土器細片が数点上層から出土したのみである。

### SK 4 (第21図、図版7)

規模・平面形は、検出面で直径1.2m～1.3m、検出面からの深さ約40cmの地点で径70cm前後、床面で径約1.0mの不整円形である。検出面から最深部までは、1.5mで、床面はほぼ平坦である。壁は、掘鉢状に掘り込み、この地点から一旦外側へ広げて、さらに床面にむかって垂直に掘り下げている。



第21図 SK 4実測図 (1 : 30)

SK 4は、調査区内でも高所に位置しているものの深く掘り込んでいるためか、第8・9層付近から覆土に水分を多く含んでいる。また、第14層は湧水の水面ラインと一致しており、土層観察から第8～10・14層は、SK 4を掘り下げた際、埋め戻したとも考えられる。遺物は全く出土していない。また、SK 4の南側に切り合い関係の認められる柱穴を検出したが、柱穴がSK 4より新しい。

### SK 5 (第4図、図版8)

SB 2の南東へ約2.5mのところに位置している。

規模・平面形は、直径約1.5

mの地点に位置している。

規模・平面形は、直径1.5mの円形土壙である。壁は、床面にはば垂直に掘り込まれ深さは、検出面から6cm~10cmである。床面は、中央部がやや窪んでいる。覆土は、黒褐色土の単一層である。遺物は、全く出土していない。

#### S K 6 (第22図、図版9)

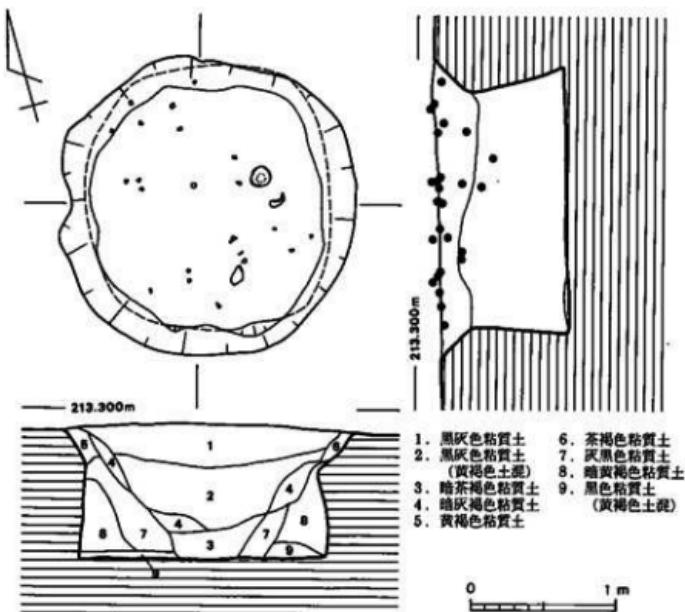
S K 7・8から北西へ約5mの地点に位置している。

規模・平面形は、検出面で直径約2m・床面の直径1.7~1.9mの円形である。床面はほぼ平坦で検出面からの深さは、90cm前後である。壁はSK4と同様に擂鉢状に掘り込み、検出面からの深さ20cmの地点から外側へ広げて掘り下げている。

覆土は、土層観察から自然堆積と考えられ、遺物の大半は第1・2層から出土している。

#### 出土遺物 (第23図、図版11)

24は復元口径12.5cmの甕で、口縁部は、頸部から「く」字状に外反して内面とも焼成は良好でナデが施されている。また、外面の中央付近に、鋭利な工具を用いた沈線が2条ナデの後に施されている。頸部以下は、外面・縦方向のハケ目、内面・横方向のヘラ削りが



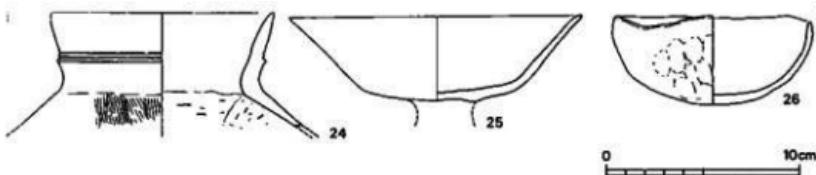
第22図 SK 6実測図 (1:40) 断面図の●は土器

施されている。胎土は、0.5mm大の砂粒を含んでいる。25は、脚部以下を欠損する高杯の杯部である。調整は、内外面とも焼成が甘く不明である。口径は15cmで、現存高は、45cmである。0.5cm大の砂粒を多く含んでいる。口縁部は、底から緩やかに外へ開き、端部は丸くなっている。脚部と杯部の接合方法は、差し込み式と考えられる。26は、手づくねの椀である。口径15~10.5cm、器高4.6cm前後で、焼成は良好、口縁部は、内湾しながら立ち上り端部は丸く終っている。調整は、内面と口縁部周辺も含めて工具を用いてナデている。外面は、指頭による圧痕が全面に残っている。胎土は、0.5mm大の砂粒を少量含んでいる。

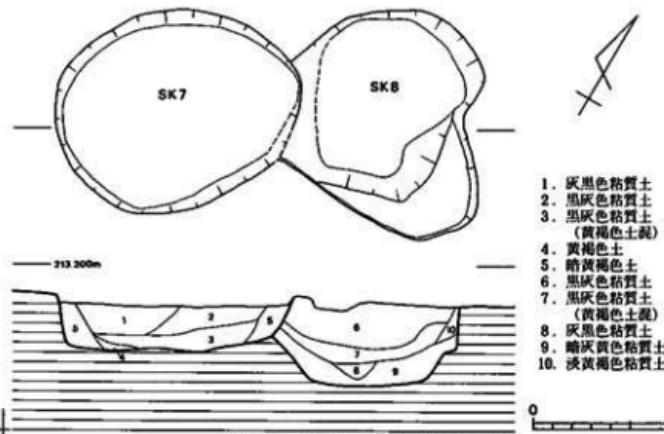
#### SK7 (第24図、図版8)

SB2から、北西へ約1.5mの地点に位置している。

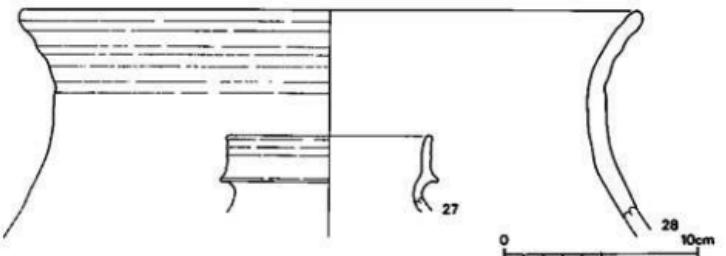
規模・平面形は、長径1.2m・短径1.0m、床面が長径1.1m、短径0.9mの橢円形である。床面は、やや凹凸が見られ平坦ではない。壁は、検出面からやや斜めに掘り込まれ、検出面からの深さは、約25cmである。



第23図 SK6出土遺物実測図 (1:3)



第24図 SK7・8実測図 (1:30)



第25図 覆土中出土遺物実測図(1) (1 : 3)

覆土は、土層観察から自然堆積と考えられる。また、SK 8とは、新旧関係を認めることができSK 7がSK 8より新しい。遺物は、土師器甕の破片が1点覆土中から出土した。

#### SK 8 (第24図、図版8)

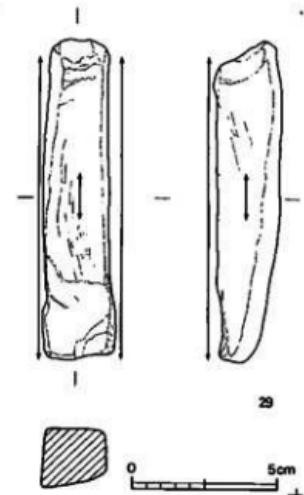
SK 8の規模・平面形は、長径約1m、床面が、径約0.8mの不整円形である。床面は、ほぼ平坦である。壁は、緩やかな傾斜で掘り込まれ、検出面からの深さは約15cmである。また、SK 8の南東隅には、径約0.7mで半円形のテラス面が存在する。検出面からの深さは、0.2mである。

覆土は、土層観察から自然堆積と考えられ、遺物は全く出土していない。

#### 覆土中出土遺物 (第25・26図、図版11)

27は、復元口径10.5cmで二重口縁の甕の破片である。口縁部は、やや外反して立ち上り、端部は僅かに平坦面を持っている。調整は、内外面ともナデが施されているが、外面は、四線状に窪んでいる。28は、復元口径31.5cmと大型の甕の口縁部片である。口縁部は頸部から緩やかに外反しており、口縁端部は丸く終わっている。調整は、内外面ともナデが施されており外面は、三条の四線状の窪みがある。焼成は甘く、1mm大の砂粒を多く含んでいる。

29は、SB 3周辺から出土した比較的硬質の石材の砥石である。四角柱状で、うち三面を使用している。底面は、縦・斜め方向に使用されている。重量は、96.8gである。



第26図 覆土中出土遺物実測図(2) (1 : 2)

## Ⅳ ま と め

今回の宮風呂遺跡の発掘調査によって古墳時代の集落跡を確認した。本地域での古墳時代の集落跡の調査は初めてであり、調査範囲が遺跡の一部であるため本遺跡の位置付けや詳細な性格について十分な検討を行えないが、ここでは、調査の成果を概観してまとめたい。

各遺構の時期については、遺物が出土した遺構が少ないために明確にし得ない。

SB1からは、土師器の壺・甕・高杯・鉢が出土しており、高杯の比率が高いのが特徴的である。これらの遺物は器種構成及び形態などの特徴から、同様な遺物が出土した遺跡を広島県北部地域に求めると、庄原市歟寄遺跡・同熊野遺跡・同大成遺跡などがあげられ、古墳時代前半期（5世紀代）に位置づけられよう。また、SB1内の南東隅に位置する土壙は、古墳時代前半期に類例がみられる形態である。こういった住居跡内土壙の用途は、作業用・貯蔵穴・祭祀などが考えられているが、本例は具体的な作業を裏付けるような遺物が出土していないことや、貯蔵穴とするには規模が小さく床面・壁溝が土壙に向って傾斜して水が集まりやすいことなどから、集水壙かまたは、住居を廃絶する際に祭祀的な行為が行われた土壙として機能していた可能性が強いと考えられる。

掘立柱建物跡については、建物跡に伴わない柱穴であるが、鼓形器台片が出土していることからSB1と同時期か、あるいはそれ以前の建物跡が存在していた可能性が想定される。なお、SB2の貼床除去後に検出した柱穴も存在することからSB2は、SB1と同時期に存在していた可能性もある。一方、中世には当地を山城として利用しており城跡に関係する建物跡も考えられよう。しかし、SB3～9までの建物跡からは遺物の出土が無く住居跡や土壙との切合い関係も認められないことから、掘立柱建物跡と他の遺構との対応関係や、所属時期は明確にできない。これらの掘立柱建物跡のうち、SB3・7の桁行方向が同一方向であり、またSB8の桁行方向とSB3・7の桁行方向がほぼ直交していることから、これらの3棟はほぼ同時期と推測される。

土壙は8基検出したが、SK1・6から甕・高杯・鉢などが出土したのみである。これらの遺物は、SB1から出土した遺物と形態的な差が認められずほぼ同時期と考えられる。また、SK1覆土中の遺物とSB1覆土中の遺物には接合した例もあることから、埋没の段階が同時期と考えられSK1とSB1は併存していた可能性もある。他の土壙の時期は不明であるが、SB1・2周辺に集中して位置していることから住居跡と何らかの関係が考えられSK1・6とさほど時期的に差がないと思われる。

8基の土壙の内SK1～4・6は、形態・規模などから貯蔵穴と考えられるがSK5・7・8の性格については不明である。

今回の調査で検出した遺構は、SB1・SK1・6が古墳時代前半期に位置付けられ、SB2・他の土壙・掘立柱建物跡の一部もほぼ同一時期の可能性が想定される。このような古墳時代前半期の集落跡は、前掲の3遺跡の他、庄原市永宗<sup>ゆきむね</sup>遺跡、高田郡高宮町<sup>たかみやま</sup>名広<sup>なひろ</sup>遺跡、同寸志名<sup>しの</sup>遺跡などが調査されている。また、本遺跡の同一丘陵上の東側に所在する田利<sup>たり</sup>遺跡でも古式土器が出土しており集落跡の存在が示唆される。

以上、述べてきたように宮風呂遺跡は、古墳時代前半期（5世紀代）の集落跡と推定されるのであるが、その生産基盤としての可耕地は地形的な制約から田利地区に求められよう。ところで、5世紀代に入ると三次盆地では、帆立貝形古墳が出現し、淨業寺・七ツ塚古墳群などの大古墳群が築造され古墳の数が急激に増加することが古くから指摘されている。三次盆地の縁辺部にあたる三良坂町地域でも、多くの古墳が築造されているが現段階では5世紀代に遡る古墳は確認されていない。本遺跡周辺でも、横穴式石室を有する野曾原東・野曾原西古墳群や田利北古墳群が見出されるものの、明確に5世紀代に位置付けられる古墳が確認されていない。こうした状況下にあって本遺跡によって改めて5世紀代の古墳の存在が示唆されるが、本遺跡が占める位置については、前述のように当地域での調査が進んでおらず、今後の資料の増加を待って検討を行う必要があろう。

#### 註

- (1) 潤見浩「広島県庄原市銀寄遺跡の調査」『私たちの考古学』17 昭和33(1958)年。ここでは、遺物をA・B・C類と分類されておりSB1の遺物は、B類と類似している。
- (2) 向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土器」『芸能』第2集 昭和49(1974)年。
- (3) 大成遺跡調査団「庄原市大成遺跡の発掘調査」昭和61(1986)年。
- (4) 広島県内の古式土器の編年は、資料が増加しつつあるものの資料的な制約もあり不充分なのが現状であるため、明確な位置付けができない。
- (5) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 昭和52(1977)年。
- (6) 三良坂町誌編集委員会「三良坂町誌」昭和48(1973)年。
- (7) 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「西山・小和田・永宗・国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」昭和57(1982)年。
- (8) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「名広遺跡-B調査区一」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第56集 昭和62(1987)年。
- (9) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 昭和54

(1979)年。

- (10) 三良坂町教育委員会 『福井山D-2号古墳一土地改良総合整備事業に伴う発掘調査』 昭和58(1983)年  
本文中の「」章に、図面が記載されている。
- (11) 宮風呂遺跡の立地する丘陵の付近は上下川が蛇行している。遺跡の対岸は、野曾原東・野曾原西古墳群が、  
河岸段丘上に立地しており可耕地は狭かったと考えられる。また、田利地区の水田は、全面積の半分近くの畦  
が乱れており氾濫原であったことが窺える。



遠 景 (北東から)



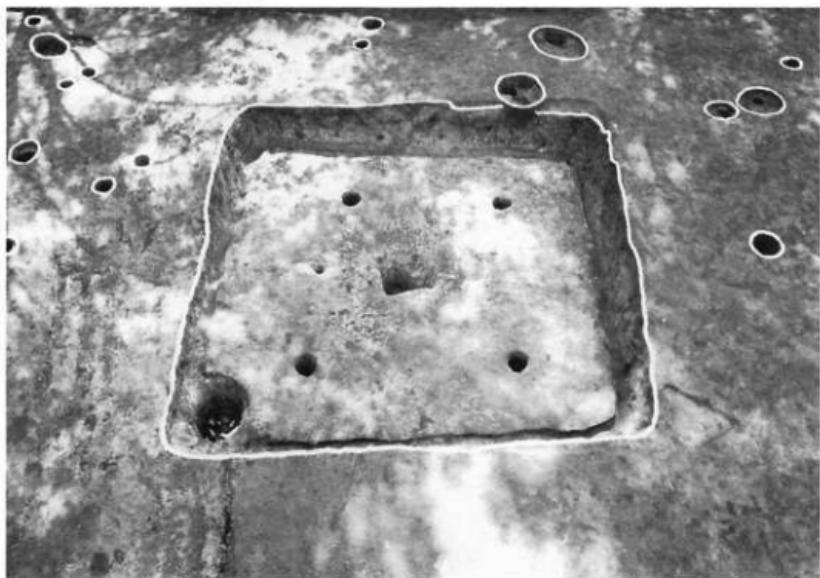
近 景 調査前 (南から)



近景 調査後 (南から)



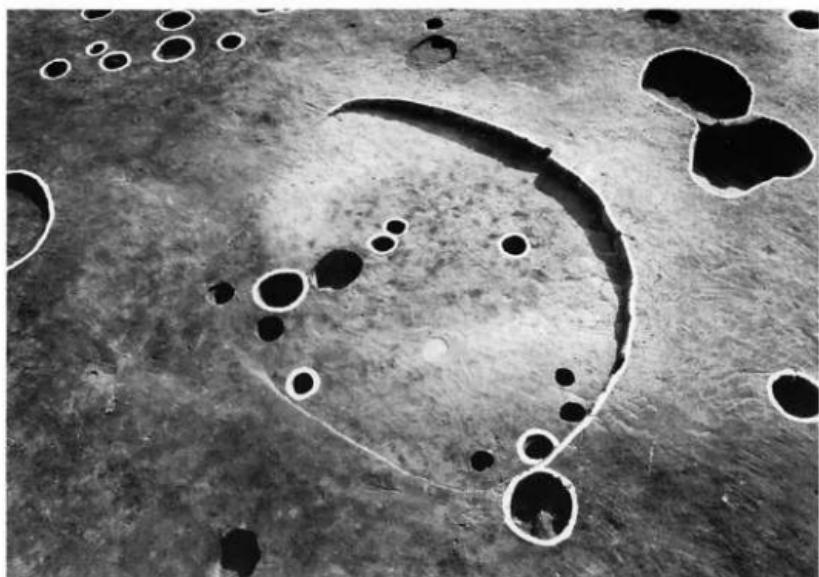
S B 1 調査風景 (南西から)



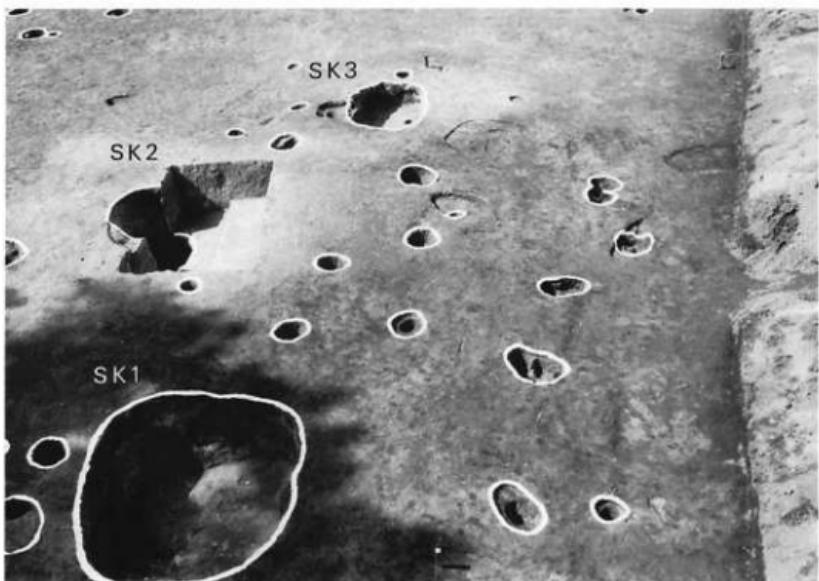
S B 1 完掘状況 (東から)



S B 1 土壌遺物出土状況 (西から)



SB2 完掘状況 (東から)



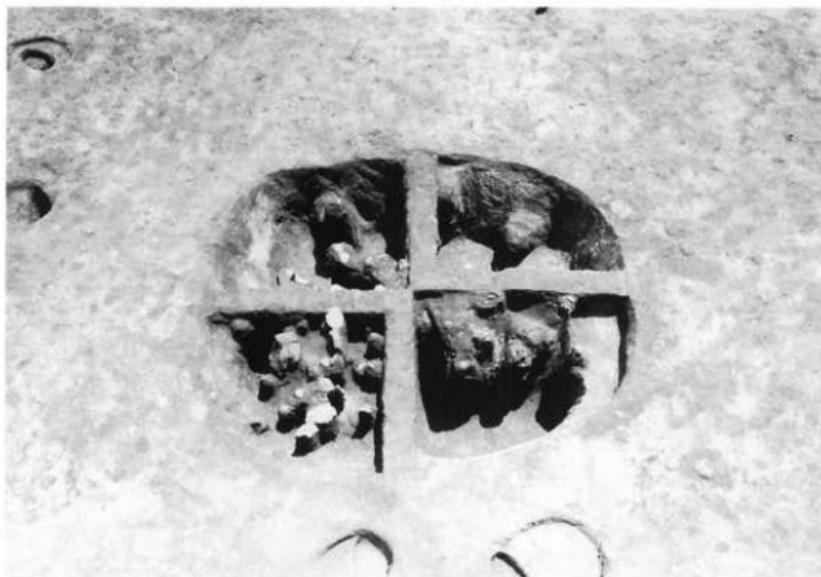
SB3 完掘状況 (南から)



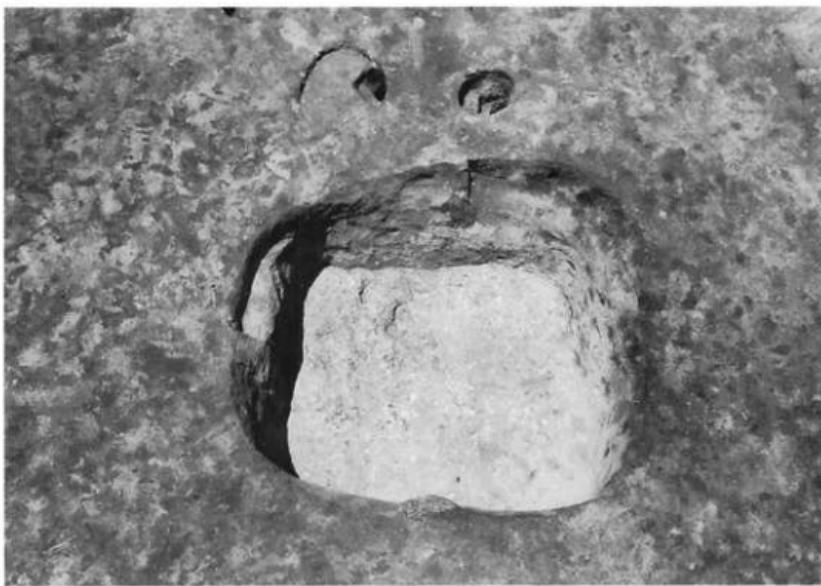
S B 4 完掘状況 (南東から)



S B 9 完掘状況 (西から)



SK 1 遺物出土状況 (西から)



SK 1 完掘状況 (東から)



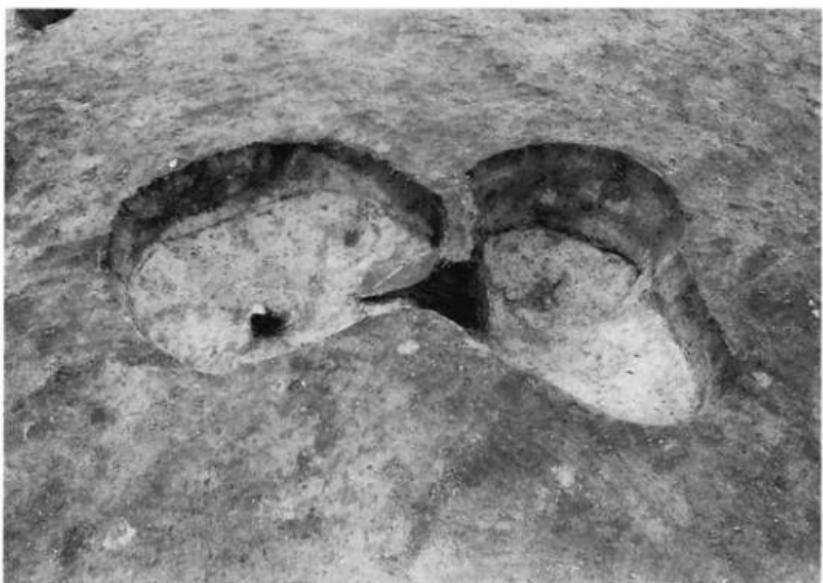
S K 2 完掘状況 (東から)



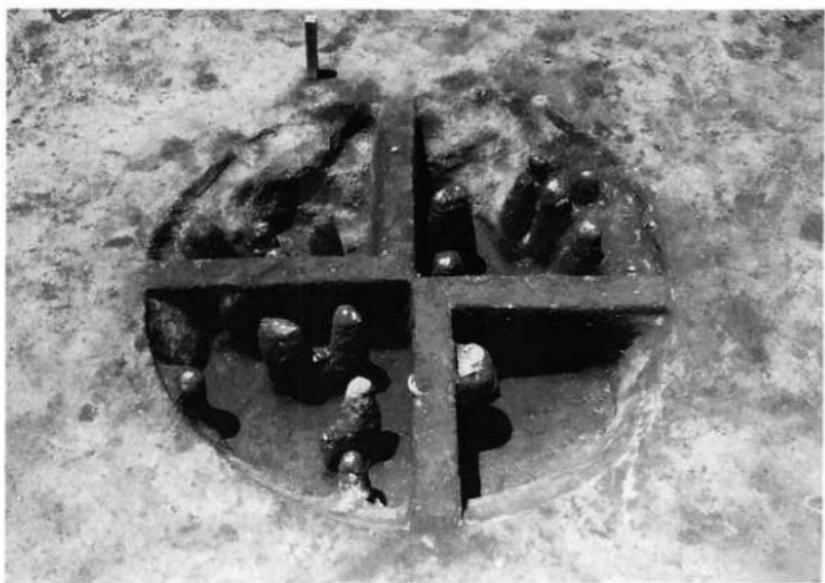
S K 4 完掘状況 (北から)



SK 5 土層断面 (南東から)



SK 7・8 完掘状況 (南東から)



SK 6 遺物出土状況 (東から)



SK 6 完掘状況 (北から)





14



21



15



23



16



25



18



20



26



27

広島県埋蔵文化財調査センター報告書 第69集

宮風呂遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和63(1988)年3月31日  
編集財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター  
発行〒733 広島市西区鶴音新町4-8-49  
電話(082) 295-5751  
印刷株式会社吉よし  
中国支社 〒730広島市中区八丁堀2-6  
電話(082) 221-6711